



それは昔組んでたバンドのギターさんが開いた飲み会から始まる物語。

お酒が入っているとはいえ、妙に親しげに擦り寄ってくる女、A子がいた。

その場はアドレス交換も無くお開きに。1週間が経とうとしたある日、ギターさんからのメールが届いた。

『前の飲み会にいたA子覚えてる？』

絵文字も何も無い、相変わらず蛋白なメールである。

『あー、そんな名前だっけ、いたねーそんな子』

飲んでたメンツの中でも可愛い方だったA子を忘れるはずもなかったが、素直にホイホイ食いつくのもみっともないと思った俺はとぼけながらもそう答えた。

5分も経たないうちに返信メールが届いた。

『A子がマコト（俺の名前）に会いたいらしいから暇な日教えて』

おいおいおいおい、この展開、速すぎじゃろう、そう思いつつ、ホイホイ食いつくのはやはりみっともないのでド暇な日をさも頑張れば大丈夫風なニュアンスで伝えた。めんどくさそうに

。

当日

自宅で待機しているとギターさんからの電話が鳴る。

「おう、起きてたかー、今から迎えに行くから20分後には出れるようにしといて」

「了解」、そう言った時点でもうすでに準備万端であった。

髪セットもバッチシキメ済である。今日はいつにもまして晴れやかな気分だ。それは外の陽気が快晴だったのもあるが、それよりも告白される期待が大きかった。

ソワソワを押し殺しつつ、10分が経った頃、ギターさんからのメールが届いた。

『A子が迎えに行く事になったからよろしく（ハート）』

あからさまな作戦やが。そう思った俺は顔をニヤつかせた。ギターさんは俺を弄んでいやがる、しかし俺の方はそんなもんに踊らされない。そこには俺なりの意地があった。

10分後、見慣れないメールアドレスからメールが来た。

『A子だよー☆覚えてる？今ついたよー（可愛い絵文字）』

そんなメールにホイホイ食いつくのもやはりみっともないので返信せず、めんどくさそうに外に出たら一台の車がとまっていた。近づく車中に小動物のような動きで手を振ってくるA子が見えた。

「いきなり誘っちゃってびっくりした？」

車を発進させてまもなくA子は聞いてきた。

「びっくりした、なしたの？」

告白される期待を押し隠し、冷静に答える俺はしたたかだった。

「マコト君に話したい事があるの」

「なんすかそれ、今言ってよ。」

「ふふ、大事な話なの、着いたら話すね」

まわりくどい話は昔から好きじゃなかった。めんどくさいのが嫌いなのである。むやむやしたまま他愛もない話が続き、目的地であるファミリーレストランへと到着した。

駐車場にはもう先に着いていたギターさんが立っていた。

合流して間もなく店へ入り、席へ着いた。店内は空いていて、窓から見える通りを行き交う車の音が聞こえるほどに静かだった。

「好きなもん食っていいよ、おごっちゃう」

ギターさんが柄にも無くそんな事を言ってきたので多少驚きつつもその店で俺がいつも注文するレギュラーバーグディッシュを頼んだ。

「デザートは？」

「は？いや、いいわ」

ギターさんが更に柄にもない事を言い出したので若干の気持ち悪さを感じ、お断りしておいた。

「で、いったい大事な話ってなんなんだい」

いつになっても本題に行かない彼らにシビレを切らした俺は自ら切り出した。

「まあ、料理来てから話すよ」

A子は恥じらいだ風を装った感じでそう言った。人間ウォッチングが趣味の俺は勘付いてしまったのだ。これは告白なんかじゃない。

料理が来て、店員さんを見送った後、ようやくギターさんが話始めた。

「マコト、ビジネスしないか」

予想を540度くらい外れたその問いに持ってた箸を落としそうになった。

「あたしたちで、おっきい事するの」

俺は10秒程、頭の中を整理した。

「それは、俺らで会社を立ち上げる的なナニカ？」

「そう、そんな感じ」

無表情のままギターさんはそう言った。

その話には俺はもう興味津々であった。

ここから詳しい内容をA子が説明していく。

「もうすでに専属契約している所の良質な商品を口コミのみで売っていくの」

「はあ、口コミのみで・・・」

「口コミのみで広めることによって良質な物を良質なまま提供し続けれるの」

「・・・」

「どう広めるのかっていうと、あたしが実際に使って、その良さを伝えるの、そしてまたそれ

を使った人が次の人に伝えるの。」

「で、次の人がまたそれを実際に使って次へと・・・」

「そう！」

「それで・・・お金は、どう回っていくの？」

「良さを伝えて使ってくれたそのお金の一部が上に回るの、だからいっぱい良さを伝えていけばそれだけお金も儲かるって仕組み」

「良さを伝えて使ってもらって事は、それを買ってもらって事ね」

「そう、そのお金の一部が上に回るの」

「マルチや~~~~~んWWW」

いきなりのこの真面目すぎる雰囲気、笑いを取り込むチャンスと見て俺はそう発言したのだが、真面目な雰囲気はそのままだった。

「違う違う、これはちゃんとした商法なのよ」

俺としてはマルチもちゃんとした商法な認識なのだが、彼女らは徹底的に自分らがやってることをマルチと認めない。そこが解せない感じだが、面白そうなのでもう少し話を聞いてみる事にした。

「もっと詳しい話聞きたいなら、今から事務所来て貰おうか」

A子はギターさんを見て言った。

「そうしようぜ、な！」

期待を込めた目で俺を見てきた。俺はやはり面白そうなので行って見ることにした。

事務所は大きな通り沿いにあり、外からも見えるガラス張りの事務所だった。中へ入ると小さなテーブルが沢山あり、それぞれに2.3個づつ椅子が置かれている。人が結構居て賑やかだった。

俺らは窓際の4人席へと座り、A子は誰かを呼びに行った。

まわりで話している人達を見てギターさんが言った。

「あの人達みんな成功者だぜ、すげえ稼いでる」

「まあ、上行けば稼げるだろうね」

「行こうぜ、一緒に」

「まず話だけ聞いてみるよ」

コーヒーを飲みながらまったり外を眺めているとA子が40手前くらいの女、B子を連れてきた。B子は年齢にそぐわぬおしゃれな服を着こなしていた。

「おまたせしちゃってごめんなさいね」

「いえいえ」

「じゃあこれから詳しい話をしていくわね、仕組みの話はもうしたのよね」

「ええ。簡単にですけど。」

A子が軽快にそう答えた。

恐らくB子の下にA子、そしてA子の下にギターさんがいて、俺をギターさんの下に付けようという事なんだろう。

「じゃあ、物から説明していこうかしら、マコト君、お風呂は入るわよね？」

「ええ、まあ、今は夏なんでシャワーですけど」

「やっぱ湯船に浸かりたいと思わない？」

「夏は別に浸からなくてもいいかなと・・・」

「冬は浸かりたいわよね？」

「確かに、冬は浸かりますね」

「わざわざお湯を溜めて入るのよね？」

「はい、そうですね」

「めんどくさいと思わない？いつでも好きな時に入りたいと思わない？」

「はあ、確かに。」

「あるのよ。それが、もうここだけの話、24時間風呂。いつでも好きな時に入れるの。」

「どういう事ですか？」

「菌をバクテリアに食べさせるの。だから24時間ずっと綺麗なの。ただ、シャンプーとかそういうの使っちゃうとバクテリアが死んじゃうの、で、シャンプー、石鹸等使わないでも綺麗に身体を洗える機能も付いてるのよ」

「ん、ちょっと意味がわからないですねえ」

「きめ細かい泡を作り出すことによってそれがヨゴレを落としてくれるのよ。そういうシャワーが付いてる。」

その事についてもものすごく懇切丁寧に教えられたのだがよく覚えていない。しかし、理にかなってはいた、物は確からしい。そこで俺はその値段を聞いてみた。額はよく覚えていないが80万くらいした気がする。

ギターさんはこれを買ったらしい。それからしばし24時間風呂の良さを語られた。分割で払えるらしい事も熱心に語られた。が、値段が値段なので頑なに断っていたら諦めたのか次の話になった。

「じゃあマコト君、人間の身体って何で出来てるでしょう」

「水、ですか」

「そう、水なのよ」

そんな話の展開で今度は浄水器の説明を始められた。活性酸素がどうのこうの言っていた気がする。

「でね？これ、浄水器に使われてる物なんだけど」

B子は変なゴムみたいなスポンジみたいな物を出してきた。

「これ、ここ、見て、なんて書いてある？」

そこに書いてあったのはブリ○ストーンというロゴだった。

「ね？知ってるでしょ？ちゃんとした所の物を使ったちゃんとした物なのよ」

いかにも自分らが売ってるものは胡散臭い物では無いという辛張である。そんな素敵な浄水器

が確か20万くらい。買えない事もないが俺的に必要無いので断り続けた。

実際この浄水器が一番売れるんじゃないだろうか、一度大きな物をふっっておいて断られた後ちょっと小さな物を提供する、そんな心理テクニックが実在する。

どんなテクニックを使われようがブレない俺を説得しきる事が出来ない彼女らは次の手段を用いてきた。

「じゃあ実際に使ってみてもらおうかしら、すぐ近くに使える所があるから行きましょう」

彼女らは売り物を集めたデモ部屋も用意してあった。ここまで来たらとことん付き合う事にした。

部屋に入るとまず浄水器が目に入ってくる、どういう仕組みなのかは忘れたが高度な技術が使われてるらしい。飲んでみたが違いはわからない。

「どう？美味しいでしょう」

「んー、あんまわからんすけどね」

「けど身体に良いからいつでも飲みに来ていいわよ」

さらさら来る気なぞ無いが適当に会話を合わせつつ奥へと歩いていくとお風呂があった。なるほどこれが24時間風呂。見るとほんとに綺麗である。水はしばらく変えていないらしい。バクテリアの力万歳。

「あたしたちは向こうで待ってるからゆっくり入ってていいわよ」

そう言って彼らはリビングへと歩いて行った。

入ってみると背中側からぶくぶくと泡が出ていた。取り外しが出来る。ほんとに細かい泡が出ている。この細かい泡が毛穴にまで入ってゴミをかき出すらしい。そしてそのゴミが後ろ側にある入れ物に入り、バクテリアが食べて出てくるのだ。常に流動しているので24時間綺麗なままなのである。

出た後確かに普通の風呂に入ったのと同様のスッキリした感覚があった覚えがある。物は確からしい。リビングへ行き、B子にその事を伝えると非常に喜んでいた。

スッキリした感覚の後更に奥の部屋へと案内された。そこにあったのはなにやらペナペナした服みたいな物があった。

「これすごい気持ち良いのよ、試してみて」

言われるがままにその服みたいな物を着てみた。B子がなにやらスイッチを入れるとみるみるうちにペナペナがモコモコになっていった。空気が入り全身が圧迫される。一定間隔で空気が抜けたり入ったりする。これにより血行が促進されるらしい。これが3万円くらいだった気がする。値段はあまり覚えていない。

しかしこれだけ体験しても欲しいという物が無いので、B子にしてみた。

「何も買わない状態で参加してもいいでしょうか。」

要は売りつければ良いこの商法自体に興味があったので聞いてみたのだが、B子の答えは実際使った者でないと良さを伝えられないという事だった。

俺としての決断はもうついていた。やりたいが商品を買わないとやれないのならやらない。

埒が明かないと察したらしいB子はまだ諦めなかった。更に一人同ランクの男、30代半ばあたりのC男を連れて居酒屋へ行く事になった。外へ出るともう周りは薄暗くなっていた。

C男もまた饒舌な男で、俺を説き伏せようとしていた。彼は物の話ではなく、お金儲けの線から攻めてきた。

「マコト君、無人島に5つだけ物を持っていくとしたら何を持っていく？」

その問いになんて答えたかあまり覚えていないが、彼の策略としては生きていくのに大切な物を言わせ、残りの1個か2個で遊興物を言わせ、それが今手に入るくらい稼げる、という非常に回りくどく、わかりづらい言い回しであると気付いたのは覚えている。そしてそれに対する俺の答えに苦笑された覚えがある。

「そーですねえ、最後の一個は・・・ラジカセっすかね」

意図しない笑いが起きた、当時俺にとってラジカセとブルーハーツのCDがあればどんなことでも乗り切れる気がしていたのだ。

俺とC男とでは価値観がまるで違っていた。ある程度の金があればそこまで金に執着しない俺と、金こそがすべてなC男。そういう人でないとマルチはやってられないとも思うが、とことん自分の価値観を押し付けてくるC男に俺は段々苛立ちを覚えていた。そしてついに俺の押しではいけないキレスイッチを彼は押し、しまったのだ。

「お金が無いと君の親にまで心配かけてしまうんだよ」
「え、意味がわからないんですけど」
「だからあ、お金が無いと、親が心配するでしょうよ」
「え、親とか関係なくないすか」
「関係あるからー、やっぱり自分の息子には立派になってもらいたいものだよ」
瞬間頭の中で何か解放された。それは理性と呼ばれる物なのかもしれない。
「金が無きゃ立派じゃねーのかよ」
俺の発言に狂気が混じったと同時に空気が凍った空間がそこに生まれた。
「親とか関係ねーだろうがよ 俺の人生は俺の人生なんだよおめーの価値観押し付けてんじやねーぞタコ」
静まり返ったその場はもう俺しか発言しなくなっていた。完全に理性がぶっとんでいた。
「聞いてんのかよおい 答えれやハゲ」
無論、彼はハゲてはいない、基本的に俺は口が悪い。
「売ってやっから試しにやらせてみつつっただけよ俺は、買わなきゃ出来んのだったらやらん、それだけ、わかった？しつけんだよタコが」
それからしばらく誰も発言しなくなっていた。嫌な静けさが漂う中、大人なB子が口を開いた。
「ごめんね、ただ、やっぱり、自分で使ってみないと良さは伝えられないのよ」
またおんなじ事を言っている。怒りを乗り越えて呆れてしまった俺は完全に意気消沈していた。

完全に空気と化していたギターさんを見るとバツの悪そうな顔をしていたのでもうここで帰ろうと思っていると、自然に皆帰り支度を始めていた。
お会計時もきっちり割り勘である。もし俺が何かを買ってこのマルチに参加していたら、おごってくれていたりしたのだろうか。そう思うと更に馬鹿馬鹿しくなってきた。

帰る時、C男が声をかけてきた。
「さっきは悪かった。送ってくよ」
大人ぶっちゃって、というひねくれた想いを胸にしまい、この人のメンツの為にも俺は彼の車に乗り、ギターさん、A子、B子に手を振った。
車の中で何の話をしていたかよく覚えていないが、家に着く頃には俺の怒りは鎮まっていた。その事を考えるとお互いわかりあうような話をしていたのだと思う。

翌日、ギターさんからメールが届いていた。昨日はごめん、といった内容である。彼は割と収入の多い仕事をしているので80万もポンと出せたのであろう。しかし彼も俺と同じ様にA子に期待して釣られたのだらうと思うと笑えてきた。というよりハナからギターさんには怒っていないのである。

あれからA子とは連絡を取っていない。そらそうだ、彼女にとって俺は釣った魚の逃した小エビだ。追ってはこない。

その後、俺はギターさんとのバンドでLIVEを行ったのだが、今じゃ何処かへ謎の疾走をした男であるD男を呼んでみた。友人達の噂では彼もまたマルチにハメられてお金が無くなり、出稼ぎに出たという事になっていた。

D男がライブハウスに到着し、俺がチケットを渡しに楽屋からホールへ出ると久しぶりの再会に若干の照れくささもありつつ、気持ち身体が小さくなった気のするD男と少し話をした。

「チケ代、女の子はタダだけど男は500円！」

冗談で言ってみただが、D男は若干本意気で嫌な顔をしつつ500円を俺に渡した。

何の突っ込みも無いその様子に肩透かしを喰らった俺はつい素直に500円を頂いてしまっていた

。冗談やが〜と言おうとした時俺の背後から「あっ」と声がした。ギターさんが手を振っていた

。「あ、どうも・・・」沈んだ声でD男が言うとギターさんが近寄ってきた。

「知り合いなん？」

俺がそう言うとギターさんが俺を指さした。

「ほら、あの前のアレやってる人だよ」

まさかの繋がりに驚いた俺は咄嗟に聞いてみた。

「D男！お前、買ったの？」

もうすでにD男はその場からいなくなっていた。